

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：37201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23601019

研究課題名(和文) ワクチンによる感染症予防策に消極的な保護者の意思決定過程、リスク認識に関する研究

研究課題名(英文) The decision-making processes and risk recognition of parents with a negative stance toward vaccinations.

研究代表者

横尾 美智代(Michiyo, YOKOO)

西九州大学・公私立大学の部局等・教授

研究者番号：00336158

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円、(間接経費) 960,000円

研究成果の概要(和文)： 予防接種なしで育児中の保護者を対象に、意思決定までの過程や育児方針、感染症への対応策等について聞き取り調査を実施した。結果、意思決定の主な情報源は先輩ママ、サークル、友人が多かった。接種なしに至った理由は権威的存在の影響、地理的要因、法的拘束力(法律上は努力義務)、情報の偏りと不足(副作用の情報が多い、説明が難解、必要性が不明)、不安、心配(かわいそう、化学物質を与えたくない)、育児方針(代替医療を利用)等が見られた。接種に代わる防御策は多くの保護者が食事への配慮で可能と述べていた。全員が育児に熱心であったが、地域での蔓延という感染症のメカニズムへの対応策は充分ではないことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)： Why do parents decide not to allow their children to be vaccinated? We elucidated the decision-making processes and childcare policies of parents, as well as their knowledge of infections and related measures, based on an interview survey.

The results showed that the sources of information that subjects cited as the basis of their decision not to allow their children to be vaccinated included more experienced mothers and friends. The reasons for not allowing vaccination included the following: geographical factors (an ER close to home), legal binding force, bias and lack of information, emotion, and childcare policy (using alternative medicine). Parents indicated that paying attention to the child's diet served as an adequate alternative to vaccinations in preventing infections.

All parents were strongly committed to childcare. However, the results showed that the parents' knowledge of the mechanisms of infections and measures toward the community were not sufficient.

研究分野：時限

科研費の分科・細目：子ども学(子ども環境学)

キーワード：予防接種 感染症 anti vaccine 保護者 意思決定

## 1. 研究開始当初の背景

子どもへのワクチン投与は、乳幼児期に最も有効な感染症予防対策の1つであり、流行阻止という社会的防衛の視点、罹患した場合の重症化阻止という個人的防衛の視点の両方からその意義は説明される。しかしながら、わが国では予防接種法で接種勧奨がなされている定期A類予防接種でも社会的防衛ラインの達成が困難なワクチンもある。また、都道府県ごとの接種率の格差も大きい。現在我が国の一部の保護者は、子どもに予防接種を与えることなしに子育てを行っている。それはなぜだろうか？筆者が実施した調査から感染症罹患経験のある子を持つ保護者は罹患経験のない子を持つ保護者よりもワクチンの必要性への認識が高いこと、金銭的問題さえ解決すれば積極的に投与したいという保護者が大半であることが明らかになった。(横尾美智代、宮城由美子、中込治、臨床とウイルス、37(3)、211-223(2009))

近年、小児保健関係者や保護者等の働きかけもあり、Hib ワクチン(インフルエンザ菌b型)、小児用肺炎球菌ワクチン、HPV(ヒトパピローマウイルス)ワクチンと海外で使用実績を持つ子ども向けワクチンが次々と認可され定期接種に組み込まれた。任意接種であった水痘ワクチンも今秋には定期予防接種に組み込まれる予定である。我が国の子どものワクチン環境は急速に整備され、保護者の金銭的負担は軽減されているのが現状だ。

しかし保護者の中には金銭的問題に関係なく自分の子どもにワクチンを与えない(与えたくない)と、積極的に予防接種を行わずに育児を行っている例が一定数存在する。またこのような保護者の存在は我が国だけではなく、米国、欧州、オーストラリア等の先進諸国の保護者にも見られることは先行研究から明らかである。近年、日本の一部の保護者に見られるこの現象は先進国に特有のそれと類似したムーブメントなのか、それとも我が国の保護者は独自の育児戦略に基づいているのだろうか。他の先進国の動向から推察すると、この先この動きは活発化することが推測される。

## 2. 研究の目的

さまざまな理由から子どもへワクチン投与をせずに育児を行っている保護者、結果的にワクチン投与は行ったが接種を行うか否かで悩んだ経験を持つ保護者の特徴を明らかにすることが本研究の目的である。但し、子どもの主治医の判断で接種を見合わせている例、単純な失念例等は除外する。決定に至るまでの保護者の思考過程および最終的な意思決定を支援した情報源や決断の根拠、予防接種を受けないことによる感染症予防のための代替手段の有無とその内容等の調査を実施した。

## 3. 研究の方法

### (1)対象者：

研究者全員がそれぞれの居住地を中心に、これまでの研究から交流のある小児保健関係者等を通して子どもへのワクチン投与を行わず育児中あるいは子育てを終えた保護者にコンタクトを取り、個別依頼を試みることから開始した。本研究の趣旨に賛同して協力(研究目的でのデータ利用を許可)して下さった保護者に、友人、知人等で当該条件に合致する保護者がいないかを尋ね、次々に対象者および範囲を拡大していく手法を取った。

前述した手法のみであれば、当該保護者の特徴に偏りが発生することが懸念されたため、ポスター、フライヤー等による調査協力依頼も実施した。許可を得た飲食店、幼稚園等にポスターを掲示、フライヤーを置かせてもらうことで広く対象者を募った。

### (2)方法：

半構造化された質問紙を用いた個別聞き取り調査を実施した。一人当たりの所要時間は1-2時間程度の質問紙になるように、プレテストで調整をし、保護者に過度の負担がかからないよう配慮をした。得られたデータは逐語録を作成し、手書きデータと逐語録の突き合わせを行いながら分析を進めた。

調査実施にあたっては、研究代表者の所属大学(当時)で承認を得た(承認番号 1041号、平成24年活水女子大学倫理委員会)。

## 4. 研究成果

### (1)概要

2011年6月から2014年3月末までの期間中に調査に参加した保護者は60名であった。本研究の対象としているのは59名である。1名は突発的事情等により調査途中で終了し、全ての項目について聞き取りができなかったため除外した。対象はすべて母親である。1例のみが夫婦による聞き取り調査であった。全く予防接種をしていない児を持つ保護者16名(27%)、一部のワクチン接種を保留しているもしくは行わなかった者30名(51%)、予防接種は行ったが接種前後に悩みあるいは強い不安があった(現在もある)者は13名(22%)であった。なお、本調査は継続中であるため、今後対象者の接種割合は変化する可能性がある。

### (2)予防接種なし児を持つ保護者について 属性について

本稿では特に予防接種なしで育児を行っている保護者(16名)の特徴について現時点で収集された情報から説明する。現時点での彼らの居住エリアは九州、関西、東海の各地方の9市町であり、1カ所に集中して存在している者を対象とした聞き取り調査ではない。また、16名の中で互いが知己の関係であ

る者は3組8名であった。接種なしの決定に、知己の関係が影響したかという点については、「悩んでいた時に意見を参考にした」という発言は見られたが、その関係性が決定の全てに影響したという者はいなかった。保護者は知人の意見も含めた複数の情報源を参考にした場合と、接種しないと決定していた後に知り合った（同一サークルのメンバーになった）という例等が見られた。

調査時の保護者の平均年齢は母親 37.1 (SD ± 5.1) 歳、父親 37.9 (SD ± 5.2) 歳であった。調査時点での子どもの数はひとりであったものが 4 人 (25%)、ふたりが 7 人 (44%)、3 人が 5 人 (31%) で、平均は 2.06 (SD ± 0.8) 人で、最大で 3 児であった。ただし、保護者は自分のすべての児に対して予防接種なしで子育てを行っているという者は少なく、複数児のうちの一部の児（最年少児の例が多い）に対して接種をしていないという例が多くみられた。主観的経済状況について「生活に余裕があるか否か」という問いかけで 5 件法を用いて質問してみたところ、図 1 のような傾向が見られた。約半数の保護者は普通という回答であったが、「余裕がない」、「やや余裕がない」が 3 分の 1 以上を占めていた。

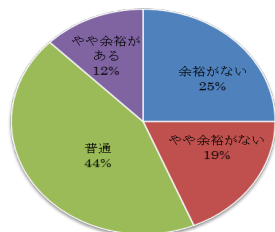


図 1. 暮らしぶり

さらに、暮らしぶりを年収ベースで尋ねた場合では、回答が得られた者 (15/16 名) の平均世帯収入 (手取り) は 446.7 万円であった。ただしばらつきは大きく、150 万円から 900 万円まで幅が見られた (図 2)。

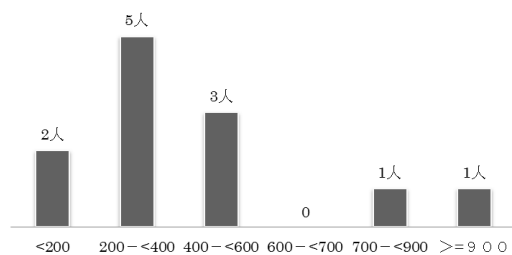


図 2. 年収 (手取り) (万円)

次に、母親の最終学歴について尋ねた。調査全体 (N=59 名) の内訳と、ワクチン接種なしで育児を行っている者 (n=16 名) の両方についてその割合を示す。なお、全体のうち 1 名の学歴が不明であるため総数は 58 名である (図 3)。本研究参加者全体の中でみた場合、高校卒業 (大学中退含む) と専門学校卒業の者が接種なし育児を行っている者の

割合がそれぞれ 50% (4/8 名、3/6 名) を占めていた。

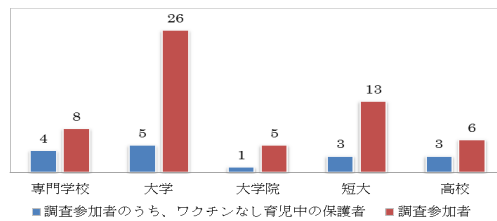


図 3. 保護者の学歴 (N=58, 不明 1 名を除外)

予防接種を行わない理由、決断に至った理由について

16 名のうち分析が完了した者 (10 名) について説明する。得られた回答を共同研究者とともにカテゴライズを行った結果、以下に大別することが可能であった (複数回答)。以下、主たる回答である。

( ) 権威的存在からの影響 (9)

- ホメオパシーを知って自分の考えに自信が持てた
  - 本を読み、ホメオパシーに出会う
  - ホメオパシーの考え方に賛同
  - 友達に勧められて、ホメオパシーの講演会に行った
  - 妊娠前後にホメオパシーに出会う、ワークショップ参加
  - マクロビオティックの店で予防接種を行っていない親の存在を知って
  - 信頼できる医師に相談、スッキリ、やらないことに決めた
  - 本
  - 講演会
- 「ホメオパシー」、「マクロビオティック」等代替医療と呼ばれているものへの影響を受けて決断した者が多く見られたほか、「医師に相談」した上で決定を下した保護者も見られた。

( ) 政府、ワクチン行政等への不安、疑問 (9)

- 接種現場の保健師の説明不足、頼りない
- 以前保健師だったが、予防接種は自分の「感覚」で疑わしい、ウソがあると思うようになった
- 行政からの冊子は信じられない (怪しい)
- ワクチン行政が気になる (ウソがありそう)
- ワクチン推進派のブログ、審議会のブログを見て疑問
- どうして不活化に動かないのか、国内企業の保護? 不信感 (註: ポリオワクチンの件)
- 国 (政府) が信用出来ない
- 自分の考え (医療への疑問) に自信がついたので
- 母親の長期入院を通して医療への疑問あり

( ) と同程度に多く見られたのが、国や自治体、ワクチン行政、医療現場への不信感であった。本調査を実施していた時期はポリオワクチンが生ワクチンから不活化ワクチン

ンへ切り替えが行われている時期で、テレビなどで生ワクチンを原因とするポリオ感染例が紹介されるのを目にする機会が多かったことにより、ポリオワクチンへの不信感という意見が見られたのだと思われる。しかしながら、国、自治体へのワクチン行政の不信感を述べた保護者に、身近な体験談を尋ねたところ、具体的事例を持っている者はいなかった。

( ) 身近な存在からの影響(7)

- 主人も納得、応援(自然なまががいい)
- 主人と相談した結果
- 自分も主人も薬、病院がキライだから
- 親戚が接種させていなかった
- 友人(助産師)の影響
- ママ友の影響
- 友人から進められた本を読んで決心

次に多かったものは、配偶者あるいは友人等身近な人からの影響である。対象者の中で配偶者(ご主人)と子どもへ予防接種をするか否かで積極的な意見の対立がある(あった)と回答した者は1名のみであり、ほかは「(配偶者は)関心がない」、「育児は任されているので」、「(私の考えを)支持してくれている」という者が殆どであった。

( ) 育児観、保護者の感情、児への期待(7)

- 体内に異物を入れたくないという思い
- こんなにたくさん(註:定期接種の種類)はかわいそう
- 子ども自身の治癒力に頼りたい
- 持って生まれた免疫力を活かしたい。ワクチンをすると正常に働かなくなるので
- 昔の子のように病気の壁を乗り越えさせる成長をさせたい
- なるべく自然なもので子育てをしたい、薬も与えたくない
- 病気を(ワクチン等で)抑えこむのは良くない

「こういう子どもに育ててほしい」という保護者の願望が、予防接種をしないで子育てを行うという育児方針と合わさっている例、感情的な問題等が7例見られた。

( ) ワクチン成分、副作用への不安、疑問(5)

- ワクチン液の害に以前から関心があった
- 副作用、ワクチンの成分が気になる
- チメロサル不安
- ワクチンには危ない成分が入っている、水銀が心配
- ワクチンに疑問を持つようになった

10名中5名がワクチン成分や副作用への疑問を持っていた。特に、水銀、チメロサルなど特定の化学物質名を列挙してその悪影響を述べる保護者も見られた。ここにおいても、保護者自身あるいは親戚、知人等で被害を受けた等の具体的な個別事例を尋ねたところ、体験談を持っている者はいなかった。テレビでの紹介やインターネット等で見た、

「何となく」という次元での不安であった。

( ) 保護者による医学的判断(3)

- 受けるなら小学生になってからでもよい
  - 感染症は、罹る時は罹るという考え
  - 「ホンモノ」の免疫を付けたほうがいい
- 10名の中に医療従事者は保健師が1名のみで他には医療従事者、感染症研究者等は見られなかった。上記3つの意見は保健師からの回答ではない。

上記以外の少数例として「信仰上の理由」を挙げた者が1名見られた。これは子どもだけでなく、保護者自身も信仰上の理由から予防接種経験がなかった。残り9名の保護者は自分自身の幼少期の予防接種は行っていた。

緊急時の対応と小児救急医療施設(E R)までの距離

予防接種なしで育児中の16名に、緊急時の対処方法について尋ねたところ、特定の疾患(ポリオ等)について、『地域で集団接種が実施されている日を確認し、それから1週間は同世代の子どもとの接触を避ける』等の対応策が聞かれたが、定期予防接種対象疾患それぞれについて対応方法を準備している保護者は1名のみであった。

いざという時に子どもを見てもらえる医療機関までの距離を尋ねたところ、図4の通りであった。



図4. ERまでの距離

全員が遠くとも車で30分以内の場所に小児救急医療施設を持つ医療機関が存在していた。ただし、利用経験があるという者はいなかった。

5. まとめ

約60名の保護者を対象に短い者で30分、長い者で5時間超の聞き取り調査を実施した結果、すべての保護者が育児に大変熱心であるという共通点が見られた。予防接種を与えないことがネグレクトの1つとして数えられているが、本調査対象者はそれとは無縁であり、真剣に育児に取り組む姿勢が印象的であった。ただし、その発言からは、感染症あるいは予防接種に関する誤解や知識不足が存在することは否めない。

例えば『昔の子のように病気を乗り越えて成長させたい』という発言から、「感染症=死なない病気、乗り越えられる病気」という根

拠のない先入観があることが示唆された。

予防接種をしない決断へ至るプロセスとしては、先輩ママ、メディア、友人との会話等のきっかけにより「ワクチン成分、医療あるいは行政に疑問があった」ところに「講演会」、「本」あるいは「相談」などを通して同じ考えの権威者、権威組織に出会い、強化され、接種しないという選択を実行するという流れが推測された。また、保護者自身がたどったこのプロセスを育児サークル等において紹介、共有するという流れで他者へ影響を及ぼすことも示唆された。

「国やワクチン行政への不信感」には、東日本大震災の影響を挙げた保護者が2名存在した（いずれも一部のワクチン接種を控えている保護者）。『3.11の後、行政が信じられなくなった』という発言が見られたことから、震災の影響の1つとしての予防接種への不信感、不安感の発生は否定できない。また、『自然に育てたいから』という言葉が見られたことは「予防接種を与えること＝自然ではないこと」という考えの存在が示唆された。

保護者の居住地は全員が都市部あるいは都市周縁部居住者で、小児科のある救急病院までは決して遠くなかった。このことは、万が一、子どもが罹患し、緊急事態が発生した時はすぐに医療が受けられるという絶対的安心感が予防接種をしないという選択の背後に存在することが推測された。このことは『離島だったら、山間部だったら（＝離島に居住していれば、あるいは山間部居住者であれば接種する）』という言葉からも裏付けられる。ワクチンを与えないという意思決定には、ワクチンの代替物として食へのこだわり（牛乳、肉、魚、パンの摂取制限、拒否など）や出産へのこだわり（自宅分娩、助産院の利用）等を挙げた保護者が見られた。これらと予防接種との関係性については今後、調査が必要だと考える。

本調査に協力して下さった約60名は皆、高い社会性を持ち、積極的にボランティア活動やサークル活動に参加をしている保護者であった。しかし残念ながら、情報の偏向性、感染症の知識不足、思い込みによる判断等も確認された。調査終了後の雑談時、「やはり接種した方がいいのか？悩んでいるので（あなたの考えを）教えてほしい」と質問してくる保護者も見られた。対象者には試行錯誤をしつつ真剣に育児を行っている様子が見られた。ワクチンを与えないという考えに固執している者というより、自分の子育て方針の1つとして接種は見送るという姿勢であるように捉えられた。

本報告書では現時点での調査参加者についての分析にとどまった。特に原因分析は16名中10名のみを対象とした。今後、調査を進め、さらに多くの事例を収集したい。そして予防接種をしないという決断をした保護者と共に最善と思われるような代替策を考え、当該児と児の居住地域のリスクコントロ

ールのための方略を提示できるよう研究を進める予定である。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計2件)

1. 宮城由美子、横尾美智代、山本八千代、下痢症に罹患した乳幼児に対する保護者の家庭療養行動、小児保健研究（査読有）70(3)、358-364、（平成23年）
2. 横尾美智代、吉川未桜、柏原やすみ、宮城由美子、乳幼児の身近な疾患のケアに対する保護者の知識に関する調査-子どもの下痢の予防に対して-、福岡県立大学看護学研究紀要（査読有）、9(1) 11-17、（平成23年）

〔学会発表〕(計4件)

1. 横尾美智代、宮城由美子、どうして母親はわが子にワクチンを与えたくないのか？-定期予防接種拒否理由の分析の試み-、第16回日本ワクチン学会学術集会、平成24年11月17日横浜市（パシフィコ横浜）
2. 横尾美智代、宮城由美子、子どものワクチン接種を忌避する保護者及び不安を持つ保護者の特徴に関する研究、第71回日本公衆衛生学会総会、平成24年10月25日山口市（クリエイティブスペース赤れんが）
3. 宮城由美子、横尾美智代、保育士からみたアレルギー疾患児保育の現場、第58回日本小児保健学会学術集会、平成23年9月3日、名古屋市（名古屋国際会議場）
4. 横尾美智代、宮城由美子、乳幼児の身近なケアに対する保護者の知識力向上のための調査、第58回日本小児保健学会学術集会、平成23年9月2日、名古屋市（名古屋国際会議場）

〔図書〕(計0件)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

横尾 美智代 (YOKOO, Michiyo)  
西九州大学・健康福祉学部・教授  
研究者番号：00336158

### (2) 研究分担者

早島 理 (HAYASHIMA, Osamu)  
龍谷大学・文学部・教授  
研究者番号：60108272

### 研究分担者

宮城 由美子 (MIYAGI, Yumiko)  
福岡県立大学・看護学部・准教授  
研究者番号：20353170